

ート、カイロやダマスカスにある政府系、私立系、ミッション系など各種の学校や大学で近代式の教育が受けられるようになった。近代の西洋式教育を導入したのは、カトリック、プロテスタント、正教会、万国イストラエル連合のユダヤ人学校など外国系ミッション・スクールが多かった。オスマン政府当局は、列強諸国というパトロンと結託した外国人宣教師が若い世代の教育を独占するのではないかと恐怖を抱いていた。そのためオスマン政府は、政府系学校を設立してそのネットワークを広げ、最終的にパレスチナでは外国系学校よりも政府系学校で学ぶ生徒の方が多くなった。普通教育の普及率や識字率はまだ高くなかったが、第一次世界大戦までの変化によって、新しい思想や新たな展望に出会う人がますます増えていった。<sup>3)</sup>アラブ住民もこうした発展の恩恵を受けたのだった。

当時のパレスチナ社会は、家父長制やヒエラルキーを大きな特徴とする農村社会のままであり、一九四八年まではおおむねその状態が続いた。農村社会を支配していたのは、少数の一族からなるごくわずかな都市エリートだった。彼らは新しい環境になじみながらも、自分の地位や特権にしがみつこうとした。一方で、そうした一族の若者は、地位と特権を守るために近代式教育を受けて外国語を学んだ。私の家系もそうした都市エリートの一つだった。新しい専門職や産業、階級が生まれたことで、一九〇〇年代には階級上昇や地位向上の点でより多くの選択肢が生まれていたが、それでもパレスチナ政治を動かしていたのは依然これらのエリートだった。とりわけ急成長を遂げた沿岸都市ハイファやヤーファアでは、エルサレムやナーブルス、ヘブロンなど内陸の保守的な都市よりもわかりやすい変化が起こった。ハイファやヤーファアでは、商業ブルジョアや新興の都市労働者階級が現れはじめていたのだ。

同時に、多くの住民のアイデンティティもまた新しいものに変わりはじめていた。私の祖父の世代なら、アイデンティティは家族や宗教、出身都市や村に基づいていただろうし、周りも祖父をそんな風に見ていただろう。祖先を敬愛し、その血筋を大事にしただろうし、クルアーンの言語であるアラビア語を話すことやアラブ文化の継承者であることにも誇りを持っていただろう。オスマン朝やその国家組織に忠誠を誓うことを当たり前のこととし、オスマン国家を偉大な初期イスラーム諸帝国から引き継いだ土地を守るとりでのように考えていたかもしれない。十字軍時代以来、ここはキリスト教世界が熱望してきた場所であり、マッカ、マディーナ、エルサレムというイスラームの聖地がある土地だった。しかし一九世紀になるとオスマン帝国内で宗教の役割が小さくなり、オスマン軍の敗北や領土喪失、ナシヨナリズムの展開や拡大が重なること、かつての忠誠心はしぼんでいった。

これらの変化は、交通手段が発達し、教育へのアクセスが広がったことで加速した。出版業が急成長して読者層が広がったことも重要な意味を持った。パレスチナでは、一九〇八〜一四年に実に三二の新聞や定期刊行物が創刊され、一九二〇〜三〇年代にかけてさらに増えた。<sup>5)</sup>民族意識を含むさまざまなアイデンティティや、労働者階級の連帯、社会における女性の役割といった社会構造についての斬新な考え方が生まれ、従来からの固定的な帰属意識を揺さぶった。民族に基づくものであれ、階級や職業集団に基づくものであれ、帰属意識はまだ形成途上にあり、複数の忠誠心が重なり合うこともあった。例えば一八九九年にユースフ・ディヤーがヘルツルに宛てた手紙からは、彼の宗教的な帰属意識、オスマン帝国への忠誠、出身地エルサレムに対する誇り、パレスチナへの明確な帰属意識を読み取ることができる。

一九一〇年代にパレスチナに住んでいたユダヤ教徒の大部分は、ムスリムやキリスト教徒の都市住民と文化的によく似た生活を送っており、彼らと穏やかに共存していた。ほとんどのユダヤ教徒は、「超正統派」と呼ばれる人びとや、「ミズラヒーム（東方系〔中東・北アフリカ出身のユダヤ教徒〕）ないしは「スファアラデーム（スペイン系〔二五世紀末にイベリア半島を追放されたユダヤ教徒の子孫〕）」と呼ばれる非シオニストだ

フェルヤッタ地区。占領当  
域とし、パレスチナ人約  
一帯での家屋破壊を阻む  
ムード・ダルウィーシュの  
がある」が描かれている  
だ。

った。ミズラヒームとスファアラディームは、中東や地中海に出自を持つ都市住民で、第二・第三言語として  
であれ、たいていはアラビア語やトルコ語も話せた。ユダヤ教徒と隣人との間に宗教的な違いがあるとはい  
え、ユダヤ教徒は外国人とは見なされず、ヨーロッパ人とも入植者とも見なされなかった。彼らはムスリム  
が多数派の先住者社会に暮らすユダヤ教徒で、彼ら自身もそう認識していたし、周りからもそう受けとめら  
れていた。<sup>(8)</sup>熱心なシオニストであるダヴィッド・ベン・グリオン（のちの初代イスラエル首相）やイツハク・  
ベン・ツヴィイ（のちの初代イスラエル大統領）など、当時パレスチナに入植したヨーロッパ出身のアシケナ  
ジームのなかには、まずは現地社会に溶け込む方法を探す者もいた。ベン・グリオンとベン・ツヴィイはオス  
マン帝国臣民の国籍まで得てイスタンブルで学び、アラビア語とトルコ語を学んだ。

産業近代化の時代には、欧米の先進国で他地域よりずっと急激な変化が起こった。このため外部観察者は  
優れた研究者であっても、パレスチナを含め中東社会は変化せず停滞しているなどと主張し、さらには「衰  
退している」とまで述べる者が多かった。<sup>(9)</sup>これがまったく事実を反していることは、今や多くの統計資料か  
ら明らかである。オスマン帝国、パレスチナ人、イスラエル、西洋諸国の史料に基づく歴史研究の蓄積がそ  
れをしつかり裏付けている。<sup>(8)</sup>ただし、一九四八年以前のパレスチナを対象とする近年の研究は、中東社会を  
衰退したものと捉える思考法がどのような誤解や歪曲に支えられているかという点にとどまらない、より広  
い関心を示している。事情に疎い部外者の目にどう映ろうとも、二〇世紀初頭のオスマン帝国支配下のパレ  
スチナには、近隣の中東社会と同じような激動を経験して活気づくアラブ社会が確かに存在したのだ。<sup>(9)</sup>

社会は外からの衝撃によって大きな影響を受けるが、なかでも大きな影響を受けるのが自己認識のあり方  
である。二〇世紀初めのオスマン帝国は、バルカン半島やリビアなどの広大な領土を失いつつ弱体化し  
た。オスマン帝国は、一九一〇〜一九二〇年のリビア戦争（トリポリとキレナイカをめぐるイタリアとオスマン帝国  
間の戦い）、一九二〇〜一九二一年の第一次・第二次バルカン戦争（セルビア、モンテネグロ、ギリシャ、ブルガリ  
アから成るバルカン同盟がオスマン帝国に挑んだ戦争でオスマン帝国が敗北し、イスタンブル周辺を除くヨーロッ  
プにあった領土をすべて失った第一次戦争の後、領土分配をめぐるブルガリアがギリシャ、セルビアを攻撃した第二  
次戦争が起きた）、第一次世界大戦において桁外れの規模で領土を失ったことが原因で消滅した。この約一〇  
年間、苦しい戦争と大変動に次々と見舞われた。第一次世界大戦中の四年間は、深刻な物資不足、困窮、飢  
餓、伝染病が起き、農業用の家畜が徴用され、働き盛りの男性の大半が召集されて前線に送られた。一九一  
五〜一八年には、現在のパレスチナ・ヨルダン・シリア・レバノンを含む大シリアで（イナゴの発生被害に  
よって悪化した）飢饉だけで死者五〇万人が出たと見積もられている。<sup>(10)</sup>

飢餓などの苦難は住民を苦境に陥れた多くの要因の一つにすぎなかった。ヨーロッパの西部戦線で驚くほ  
ど多くの犠牲者が出たため、この戦線に注目する研究者は多いが、オスマン帝国も全人口の一五%にあたる  
三〇〇万人以上の死者を出し、主要参戦国のなかでは最大の戦争被害を受けていたことはあまり知られてい  
ない。犠牲者の大半は民間人だった（一九一五年および一六年にオスマン当局の命令で行われた虐殺で、単一集  
団にして最大規模の犠牲者を出したのは、アルメニア人、アッシリア人のほか、他のエスニック集団に属するキリス  
ト教徒もだった<sup>(11)</sup>）。さらに召集された二八〇万のオスマン兵のうち、戦死者は七十五万人にのぼった可能性があ  
る。兵士のうちアラブ人の死者の割合も高かった。イラクと大シリアで召集されたアラブ人部隊が、まとめ  
てオスマン軍の対ロシア東部戦線、ガリポリ、シナイ半島、パレスチナ、イラクなどの血なまぐさい戦場に  
送り込まれたためだった。人口統計学者ジャスティン・マッカーシーの推計によれば、一九一四年までは年  
間約一%ずつ増加していたパレスチナの人口は大戦期に六%減少した。<sup>(13)</sup>

ッタ地区。占領当  
、パレスチナ人の  
の家屋破壊を阻む  
・ダルウィーシュの  
）が描かれている

sapientia 71  
サピエンティア

The Hundred Years' War on Palestine

# パレスチナ戦争

入植者植民地主義と抵抗の百年史

Rashid Khalidi

ラシード・ハーリデー [著]  
鈴木啓之・山本健介・金城美幸 [訳]



法政大学出版局